

1. 宿場町の文化と誇りを地域で活かそう

なぜ、いま東海道川崎宿を活かしたまちづくりか？

宿場町「川崎」の
危機

脚光を浴びる
東海道

生まれ変わろうと
している街道周辺

川崎宿の歴史と文化を地域活性化に活かすのは「いま」しかない！！
目標年次を川崎宿起立 400 年にあたる 2023（平成 35）年に定めます。

1) 宿場町「川崎」の危機

「川崎宿」の歴史、その面影を後世に伝えていくために、「いま」、市民と行政との協働による「歴史資源の保存」と、それを活かしたまちづくりが求められています。

全盛期には 70 軒以上の旅籠が建ち並んだ川崎宿も、現在のまちなみにその面影を見ることはできません。これは、先の震災や大戦の空襲で、宿場時代の面影を伝える多くの建造物や史跡などが失われてしまったからです。また、その後のまちづくりにおいても、「歴史的な資源を活かす」視点が弱く、歴史が風化していくのをただ見過ごしてきてしまったことも影響しています。

とはいえ、まだすべてが失われたわけではありません。街道付近には現在も多くの神社仏閣やいくつかの蔵や資料が残されており、現在まで伝えられている祭事なども少なくありません。まだ埋もれている資源や資料もあるでしょう。これらの資源の中には、すぐにも保存の手を打たなければ、風化、滅失してしまうものもあります。それは、形ある資源や資料だけでなく、語り継いでいくべき物語や文化についても同様です。

■この間の動き（平成 15 年 4 月～23 年 3 月）

街道沿いには、マンションや駐車場が増えており、川崎宿にふさわしい賑わいや風格を持ったまちなみの形成には至っていません。とくに個人の方が所有する建物等は、保存が難しい状況です。

一方、江戸意匠の案内板や解説板、シャッター浮世絵の設置等が進められています。また、個人の商店の中には、白壁の店構えにしたり日除けのれんをかける店も出てきました。さらに、坂本九さんや佐藤惣之助など、川崎宿と縁の深い人物の顕彰、一行寺での閻魔寺寄席の開催など、人物の掘り起こしや新しい文化の創造に取り組んでいます。

■これからの方向性

東海道川崎宿にふさわしいまちなみ形成を推進するために、商店はもとより、個人住宅の建て替え、マンションの建設の際などに協力を求めます。また、これまで取り組んできたシャッター絵の設置については、今後も継続するとともに、その活用を図ります。

一方で、財政状況の厳しい中にあり、水路の復活、電線の地下埋設等ハード面の整備に関しては、提案を尊重しつつ、実現の可能性を見極めながら検討します。

2) 脚光を浴びる東海道

「宿制 400 年」に加え、街道散策ブームのいま、東海道は脚光を浴びており、「東海道川崎宿を活かした観光と地域活性化」への気運が盛り上がっています。

高齢化社会が進む中、健康づくりの視点はもとより、まちの歴史や文化に触れて魅力を味わう「まち歩き」の人气が高まっています。

地域史に関心を持つ人びとにより川崎宿の歴史や文化を掘り起こして語り伝える努力は地道に続けられていましたが、平成 9 (1997) 年に発行された『区づくり白書』では、初めてまちづくりの観点から川崎宿を取り上げました。また、平成 13 (2001) 年は、江戸幕府によって東海道の宿駅制度が敷かれた慶長 7 (1601) 年からちょうど 400 年目にあたり、全国的にも東海道の歴史を振り返り、地域活性化の起爆剤とする気運が高まりました。神奈川県でも「東海道ルネッサンス事業」として、歴史的景観や史跡を意識した道路整備やシンポジウムが開催されました。

川崎でも、史跡を案内するボランティアガイド組織が立ち上がったほか、「大川崎宿まつり」が開催されるなど市民レベルでのさまざまな動きが活発になってきました。

「ふるいもの（歴史）があたらしい」と言われ、地域のアイデンティティが改めて注目されています。歴史を活かした観光開発などの地域活性化は、そのまま個性あるまちづくりにつながります。川崎には他地域にない、独自の歴史と文化があるのです。

■この間の動き（平成 15 年 4 月～23 年 3 月）

平成 15 (2003) 年 9 月、小美屋跡地に映画館やレストラン、書店、日用雑貨や趣味の商品を扱う店等の入った川崎 DICE がオープンし、多くの集客がありました。しかし、平成 18 (2006) 年には、川崎駅西口に大規模商業施設「ラゾーナ川崎」が誕生し、人の流れが東口から西口へと大きく変わりました。

東口では駅前広場の整備が完了しました。新たなバス停留所が整備され、平面で駅前を横断できるようになりました。また、エレベーターが設置されるなど、駅のバリアフリー化が進められています。

また、平成 25 (2013) 年には、東海道川崎宿の情報発信・交流拠点となる「(仮称) 文化交流拠点施設」の建設が計画されています。



■これからの方向性

川崎宿を訪れる人が楽しく歩ける魅力ある歩行空間づくりを行います。

横丁の愛称募集、シンボルマークやキャラクターの公募等を通じて、今後は一般市民の東海道川崎宿に対する意識をより高めるとともに、川崎宿起立 400 年に向けて、川崎市の観光資源の一つとして、川崎宿活性化に対する気運を盛り上げます。

一方で、東海道川崎宿を活かしたまちづくりを進める上で、その担い手の中心となる組織の育成・拡充に努めます。

3) 生まれ変わろうとしている街道周辺

再開発で東海道周辺や川崎駅前が大きく生まれ変わろうとしているいまこそ、まちづくりに歴史と文化を活かした地域活性化の風を吹き込む最大のチャンスです。

川崎駅や東海道の周辺では、現在さまざまな大規模再開発事業が進行中であり、西口地区やかわさきテクノピア地区は新たな総合商業地区として再生されています。

東海道のすぐ近くでも、北口の小美屋デパート跡地を中心に複合商業ビルの建設が進み、チネチッタの一面もアミューズメントシティ“ラ チッタデッラ”と名づけられたイタリア風のまちなみが生まれました。また、街道筋でも、芭蕉の句碑の斜め向かいに警察署が移築されました。

このように、新しくまちが生まれ変わろうとしているいまこそ、市民、商店街、企業と行政が力を合わせて「東海道川崎宿の歴史を活かしたまちづくり」の気運を高めていく絶好の機会です。

■この間の動き（平成 15 年 4 月～23 年 3 月）

平成 15（2003）年 9 月、小美屋跡地に映画館やレストラン、書店、日用雑貨や趣味の商品を扱う店等の入った川崎 DICE がオープンし、多くの集客がありました。しかし、平成 18（2006）年には、川崎駅西口に大規模商業施設「ラゾーナ川崎」が誕生し、人の流れが東口から西口へと大きく変わりました。

東口では駅前広場の整備が完了しました。新たなバス停留所が整備され、平面で駅前を横断できるようになりました。また、エレベーターが設置されるなど、駅のバリアフリー化が進められています。

また、平成 25（2013）年には、東海道川崎宿の情報発信・交流拠点となる「(仮称)文化交流拠点施設」の建設が計画されています。



■これからの方向性

川崎駅のバリアフリー化、東口の整備を起爆剤として、より多くの人々が川崎宿を訪れる仕掛けづくりが必要です。駅からの平面横断が可能になったことで、駅から川崎宿へのアクセスが容易になりましたが、より多くの人に川崎宿を訪れてもらうためには、駅施設のバリアフリー化にとどまらず、川崎宿が安全に、安心して歩ける歩行空間となる必要があります。また、わかりやすい案内板の設置やルート表示も必要です。

さらに、西口の大型商業施設を訪れる人々を川崎宿へと誘導するために、魅力的なイベントの開催や、ターゲットに応じて多様な媒体を活用するなど、効果的な情報発信を行います。

今後は、「(仮称)文化交流拠点施設」の整備を起爆剤として、川崎宿のまちづくりに取り組みます。